

# 宗教と主観的幸福感について

## —死の忘却とコンサマトリー化する現代—

木村 優里  
(京都女子大学大学院研修者)  
濱崎 由紀子  
(京都女子大学現代社会学部)

主観的幸福感に関する統計学的研究はこれまで数多く行われてきたが、その中でも近年、個人の信仰が主観的幸福感に寄与していることを示す国内外の研究が注目を浴びている。では無宗教者が7割以上と報告される現代日本人にとって、「幸福」とはいかなる要因によって形成されているのだろうか。当該研究ではこれを検証するべく、若年層を対象に主観的幸福感に関するアンケートを実施し、データの統計解析を行った。その結果、無宗教者は宗教信者よりも日常生活上の多くの項目が幸福感到に影響するために幸福感到が変動しやすいことが判明した。またこれらの項目をマズローの提唱する5つの欲求階層（生理的欲求、安心・安全欲求、愛・所属の欲求、自己承認欲求、自己実現欲求）にグループ化して独立変数として扱い、各宗教信者群及び無宗教者群それぞれで幸福感到を従属変数とした重回帰分析を行った。結果は各宗教群で異なり、宗教の有無やその種類が個人の主観的幸福の認知に影響することが示唆された。特に無宗教者群では承認欲求の充足が幸福感到に強く寄与していることが明らかとなり、これらの結果をもとに現代若年層におけるメンタルヘルスの問題を精神病理学的に考察した。

キーワード：宗教、主観的幸福感、現代若年層、マズロー、不幸スイッチ

### はじめに

現代日本人が物質的に豊かな暮らしを享受していることは周知の事実といえよう。現在 GDP の数値は世界3位と高水準<sup>48)</sup>であり、利便性に富んだ衛生的環境下での暮らしを多くの国民が手にしている。しかしながら、国連が発表する2018年世界幸福度ランキングでは日本は54位と低位であり、これはG7の中では最下位となっている<sup>38)</sup>。また、我が国の自殺率は高水準を保ち続けている。『平成30年度自殺対策白書』(2017年閣議決定)<sup>20)</sup>によると、日本の自殺率は世界ワースト6位に位置する。なかでも15～39歳の若年層の死亡原因で最も多いものが「自殺」であり、自殺の原因の1位は「うつ」とされる。では衣食住に事足りてあらゆる選択の可能性を与えられているかに思われる現代日本人にとって、「幸福」あるいは「不幸」とは一体どのような要因によって形成されているの

だろうか。Hommerich、小林らの調査によると、日本人の成人男女の約15%の人が自身の生活を「満足しながら不幸」と感じて<sup>13)</sup>いる。人は生活の満足以上に何を得れば「幸福」と感じるができるのだろうか。この問いを発する前に、まず「幸福」とは何であるのかを考える必要がある。

「幸福」という概念はアリストテレス『ニコマコス倫理学』<sup>2)</sup>のエウダイモニア (eudaimonia) が起源であるとされる<sup>41)</sup>。アリストテレスに始まる幸福論は、個々人の求める「快」に基づく生活の中に幸福があるという考え方が基本となっており、その「快」の種類によって単なる快楽主義的な「低い」幸福や、名誉のような政治的生活者としての幸福や、より知的で高度な観照的生活者としての幸福であるなどの差が生じると考えられている。アリストテレスを始祖とする「快」に基づく幸福

論は近現代ヨーロッパの幸福論の基調であり、幸福主義（エウダイモニズム）と呼ばれるに至った。「幸福」という日本語が出現したのは明治初期であり、英国の功利主義に関する著作の中で“happiness”を翻訳する際に作られた造語であった。「禍福はあざなえる縄のごとし」という感性の下で、よい出来事や悪い出来事は自然に降りかかってくるものと捉えていた日本人のもとに突如、「幸福」というイメージと、「最大多数の最大幸福」を目指す功利主義の概念が同時に現れたといえる。

1980年代以降、幸福を計量的に取り上げる研究は盛んに行われてきた<sup>1)7)8)9)10)42)</sup>。中でも、エド・ディーナーの研究<sup>7)</sup>はこれらの端緒となるものであり、彼の「人生満足尺度」は幸福感の尺度として現在においても多くの研究で活用されている。欧米での計量的研究に続き、我が国においてもこの20年の間に主観的幸福感に関する諸変数を扱った複数の記述統計学的研究が行われてきた<sup>12)22)23)24)35)44)47)</sup>。これらの研究により明らかにされたことは、幸福感は個人の置かれる環境などの外的条件により大きく変動するということがあった。しかし2010年以降になると、外的条件が同じであっても個人の内的条件、その中でも特に個人の信仰が幸福感に大きく影響していると指摘する国内外の研究が相次ぎ、同趣旨のEllisonらの研究が再評価されるに至った<sup>9)10)21)37)39)</sup>。また世論調査で知られる米国企業GALLUPが世界140カ国以上をカバーした調査（Gallup World Poll）では、信仰心があつく礼拝や儀式にもよく参加する人の幸福感がそうでない人よりも高いことが明らかにされている<sup>45)</sup>。

ところが現在、日本における宗教信者の割合は低く、宗教は異質なものとして捉えられる風潮さえある。統計数理研究所が2013年に行った「日本人の国民性調査」<sup>46)</sup>によると、「何か信仰とか信心とかを持っていますか」という質問に対し、「もっている、信じている」と答えたのは28%、「もっていない、信じていない、関心がない」と答えたのが72%であった。また日本の宗教人口の割合は高齢者に偏っており、70歳以上で44%、60代では31%、50代では25%、30代40代では20%、20代のみでは13%と世代を追うごとに宗教人口は低下し

ている。これには第二次世界大戦時下における国家神道政策と敗戦によるその崩壊や、その後のスピリチュアルブーム時におけるカルト事件の多発などが少なからず影響しているといえよう<sup>5)6)</sup>。現在、日本においては憲法により「信教の自由」が明記されているが、これについて教育学者の山口は、日本では信教の自由の保障にあたって義務教育に際していかなる宗教教育も行われないうえ、これが単に特定の宗教に傾倒した教育を受けさせないことで諸宗教への公平性を保証するだけでなく、結果として「宗教」全体への畏怖感情を持たせ、宗教を敬遠させる風潮を助長していると述べている<sup>49)</sup>。実際に、日本人は妄信的であることや異様な団体意識がある状況について「宗教的」と表現することもしばしばあり、宗教に対して少なからず無意識的な抵抗感を持っていることは否定し難い。では、宗教が希薄化していく現代若年層において、その幸福感のあり方はどのように変化してきているのであろうか。これを明らかにするために、宗教と幸福に関する先行研究を踏まえたうえで、個人の信仰が主観的幸福感に寄与しているという仮説を立て、現代若年層を対象に記述統計学的研究を行うこととした。

これまでの幸福感に関する先行研究においては、主観的な幸福感と生活環境や個人の気質など様々な外的・内的条件について関連が分析されている<sup>12)24)26)35)40)44)47)</sup>が、これらの研究が扱う幸福度パラメーターは分散的で、主要な学説に依拠しているとは言えない。そこで当該研究では近年様々な学問領域で再評価され注目されるマスロー（Maslow, A.H.）の5つの欲求階層<sup>28)29)30)</sup>を主観的幸福感に関連する因子として扱い、主観的幸福感との相関を分析する。マスローによると、人間は5つの階層の下位から順（生存欲求、安全欲求、愛所属欲求、承認欲求、自己実現欲求）に欲求が生まれるものであり、低次の欲求がある程度満たされた段階で上位の階層の欲求が生ずるとされる。本研究では現代人のライフスタイルに鑑み、下位から上位へといった継時的な連関を想定せず5つの欲求階層を独立したものとして扱うこととした。

**I. 対象と方法**

当該研究では我が国における宗教信仰と個人の幸福観の関連について、各宗教群（仏教徒群、キリスト教徒群、天理教徒群）および無宗教群ではそれぞれ幸福に寄与する欲求階層（マスロー）が異なることを仮説とし、記述統計学的に検証した。2018年8月から同年11月、以下のアンケート調査を行った。当該研究は2018年8月6日に京都女子大学臨床研究倫理審査委員会により研究実施の承認を受けている。

**(1) 対象**

機縁法により集められた関西在住の18歳から29歳の学生150名（内訳は関西大学：30名、京都女子大学：20名、天理大学：61名、キリスト教学生会：30名、その他大学生：9名）である。平均年齢は19.7±1.4（男性19.8±1.5、女性19.6±1.3）で、t検定の結果男女間に有意差はなかった（p=0.242）。

**(2) 方法**

オリジナルのアンケートによる調査を実施した。アンケートについては、マスローの欲求階層概念とカテゴリをもとに質問項目を作成した。その構成は以下の通りである。

Q1：対象者の年齢・性別、Q2：主観的幸福感、Q3：生存欲求の満足度（「睡眠はしっかりとれている」「バランスの良い食事をとれている」「生活のリズムが保たれている」「今の自分の健康状態は良好である」の4項目）、Q4：安心・安全欲求の満足度（「住まいは快適である」「おおむねリラックスして過ごしている」「生活は安定している」「住む地域は治安がいい」の4項目）、Q5：愛・所属の欲求の満足度（「家族との関係は良好である」「仲の良い友人がいる」「恋人または配偶者との関係は良好である」「自国を愛している」の4項目）、Q6：承認欲求の満足度（「体系や容姿をほめられる」「人から必要とされている」「周囲から正当な評価を受けている」「社会に貢献している」の4項目）、Q7：自己実現欲求の満足度（「将来に目標やビジョンがある」「困難を乗り越え、成功した経験を持つ」「仕事や勉強

にやりがいを感じている」「周囲に流されず、自分の主義を貫いている」の4項目）、Q8：信仰の有無（特定の宗教を選択）とその信仰度、以上である。

Q2は“0：とても不幸である”から“10：とても幸福である”の11段階、Q3～Q7は“0：あてはまらない”、“1：ややあてはまらない”、“2：どちらでもない”、“3：ややあてはまる”、“4：あてはまる”の5段階尺度で回答を得た。Q8の信仰度についても同様の5段階尺度で回答を得た。

アンケートは、研究目的やオプトアウト機会の保障などの倫理的配慮について記述された説明文書とともに対象者に配布され、アンケートへの回答をもって調査協力に同意したものと見なされた。回収したデータの統計解析にはIBM SPSS Statics 24を用いた。

Q8での回答をもとに対象を宗教群別に分類したところ、無宗教者68名、仏教徒22名、キリスト教徒30名、天理教徒26名、その他4名であった（表1）。

表1 対象の信仰属性

	n	%
無宗教	68	45.3
仏教	22	14.7
キリスト教	30	20.0
天理教	26	17.3
その他	4	2.6
合計	150	100

**II. 研究結果**

**(1) 宗教群と無宗教群における主観的幸福度の比較**

アンケート対象者全体の幸福度の平均は7.06であった。宗教群平均は7.33±2.07で、無宗教群平均の6.74±1.95と比べやや高い値となったがt検定の結果、両群間に有意差は認められなかった（p=0.075）。

(2) 主観的幸福度と相関のある項目—各宗教群の比較

Q3～Q7の欲求満足度に関する全20項目と主観的幸福度について相関分析を行った。相関分析の結果、主観的幸福度に相関することが示された項目は以下の通りである (\*\* は  $p < 0.01$ 、\* は  $p < 0.05$ を示す)。

① 仏教徒群

全20項目のうち「生活は安定している」「仲の良い友人がいる」「社会に貢献している」の3項目に有意な相関が認められた(相関係数はそれぞれ0.547\*\*、0.424\*、0.526\*)。

② キリスト教徒群

全20項目のうち「健康状態は良好である」「生活は安定している」「家族との関係は良好である」「仲の良い友人がいる」「恋人との関係は良好である」「体型や容姿を褒められる」「正当な評価を受けている」「社会に貢献している」の8項目に有意な相関が認められた(相関係数はそれぞれ0.394\*、0.450\*、0.390\*、0.408\*、0.642\*\*、0.431\*、0.529\*\*、0.448\*)。

③ 天理教徒群

全20項目のうち「健康状態は良好である」「仲の良い友人がいる」の2項目に有意な相関が認められた(相関係数はそれぞれ0.448\*、0.468\*)。

④ 無宗教群

全20項目のうち「睡眠はしっかりとれている」「生活リズムが保たれている」「健康状態は良好である」「住まいは快適である」「おおむねリラックスしている」「生活は安定している」「住む地域は治安がいい」「家族との関係は良好である」「仲の良い友人がいる」「自国を愛している」「人から必

要とされている」「周囲から正当な評価を受けている」「社会に貢献している」「困難を乗り越え成功した経験を持つ」「仕事や勉強にやりがいを感じている」の15項目に有意な相関が認められた(相関係数はそれぞれ0.241\*、0.248\*、0.437\*\*、0.283\*、0.319\*\*、0.474\*\*、0.313\*\*、0.267\*、0.340\*\*、0.340\*\*、0.466\*\*、0.376\*\*、0.266\*、0.347\*\*、0.277\*)。

(3) 主観的幸福度に最も寄与する欲求階層の満足度—各宗教群の比較

マスローの5段階欲求階層(図1参照)に相応する「生存欲求の満足度」「安心・安全欲求の満足度」「愛・所属の欲求の満足度」「承認欲求の満足度」「自己実現欲求の満足度」各々のトータルスコアを算出した。各欲求階層の満足度を独立変数、主観的幸福度を従属変数として宗教群別に重回帰分析を行った。解析結果は表2～表5および図2に示す。

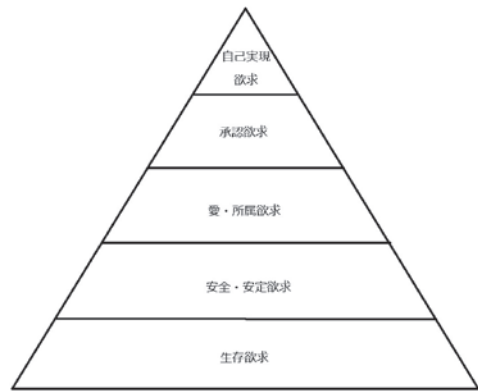


図1. マスローの5段階欲求の図<sup>28)</sup>

仏教徒群では、特に有意に主観的幸福度に寄与

表2 仏教徒群の重回帰分析結果

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	3.378	2.011		1.679	.112
生存欲求	.000	.160	-.001	-.003	.998
安全欲求	.031	.214	.054	.146	.885
愛所属欲求	.114	.225	.178	.507	.619
承認欲求	.107	.178	.164	.601	.557
自己実現欲求	.096	.138	.185	.698	.495

a. 従属変数 幸福度

表3 キリスト教徒群の重回帰分析結果

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	.484	1.915		.253	.803
生存欲求	.004	.091	.007	.039	.969
安全欲求	-.015	.127	-.024	-.118	.907
愛所属欲求	.405	.145	.541	2.786	.010
承認欲求	.170	.111	.262	1.529	.139
自己実現欲求	.081	.127	.096	.638	.530

a. 従属変数 幸福度

表4 天理教徒群の重回帰分析結果

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	-1.154	3.243		-.356	.726
生存欲求	.205	.155	.276	1.323	.201
安全欲求	-.188	.169	-.211	-1.109	.280
愛所属欲求	.749	.248	.613	3.016	.007
承認欲求	-.283	.212	-.344	-1.334	.197
自己実現欲求	.146	.165	.212	.885	.387

a. 従属変数 幸福度

表5 無宗教者群の重回帰分析結果

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	1.576	1.243		1.268	.210
生存欲求	.105	.074	.181	1.421	.160
安全欲求	.095	.078	.160	1.205	.233
愛所属欲求	.159	.099	.190	1.607	.113
承認欲求	.154	.079	.252	1.939	.054
自己実現欲求	-.007	.074	-.012	-.096	.924

a. 従属変数 幸福度

するものは見られなかった。

キリスト教徒群では、愛・所属欲求の満足度が主観的幸福度に寄与することが分かった (p = 0.01)。

天理教徒群では、キリスト教群と同じく愛・所属欲求の満足度が主観的幸福度に強く寄与していた (p=0.007)。

無宗教者群では、承認欲求の満足度が主観的幸福に寄与する傾向のあることが示唆された (p = 0.057)。

### Ⅲ. 考察

検証の結果、信仰する宗教によって主観的幸福の認知に寄与する因子に違いがあることが示された。主観的幸福度と欲求満足度全20項目の相関分析の結果では、無宗教者群で15項目と多くの相関がみられた。一方で、仏教徒群では3項目、キリスト教徒群では8項目、天理教徒群では2項目と宗教群では相関項目が少なかった。この結果から、宗教を持たない人は多岐にわたる日常生活の様々な事柄によって主観的幸福度が影響を受けやすいことが分かった。また宗教群別に行った欲求階層

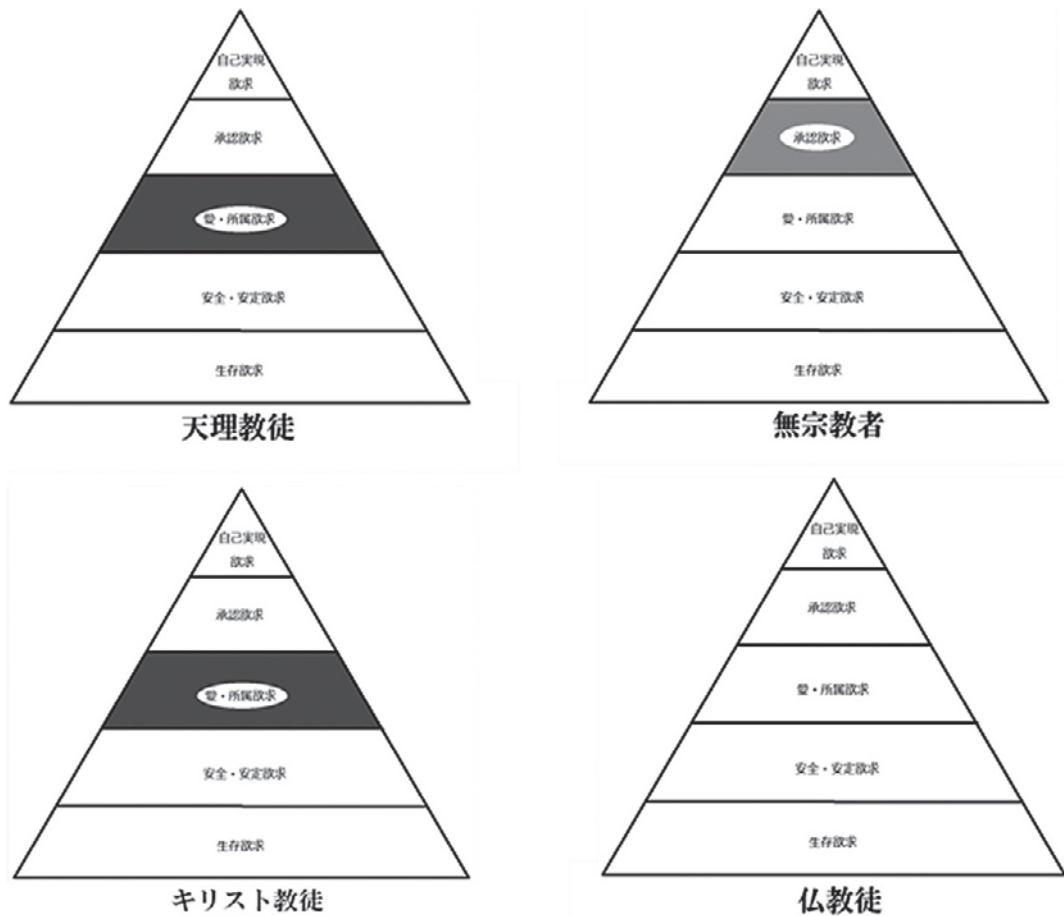


図2 各宗教群別に見た幸福寄与因子

(マズロー) 満足度と主観的幸福度の重回帰分析では、キリスト教徒群および天理教徒群では「愛・所属の欲求」の満足度が主観的幸福に寄与し、無宗教者群では「承認欲求」の満足度が主観的幸福度に寄与することが示された。一方で、仏教徒群では欲求階層の中に特定の寄与因子が存在せず、日常生活上の様々な要因によって主観的幸福度が変動しにくいことが明らかとなった。

現代は承認不安の時代<sup>50)</sup>とも称され他者からの評価を過度に重視する風潮にあるが、これは宗教や宗教的価値観の希薄化と無関係ではないだろう。木村は、「宗教心なり、超越者の体験なりというもの一旦持ってしまうと、現世での我々の日常的な生存というか、生きているということが非常に相対化される」と述べている<sup>19)</sup>。当該研究にお

いても宗教群は概ね主観的幸福の認知が変動しにくく、一方で無宗教者群では日常の多くの事柄によって幸福感が日々変動し、特に承認欲求が満たされているか否かによって幸せや不幸の認知が大きく変わることが分かった。木村の精神病理学的考察と当該研究の解析結果は齟齬のないものであるといえよう。刻々と無宗教化が進む現代日本において、人々の幸福感がより浮沈しやすくなることがメンタルヘルス上の問題に繋がることは想像に難くない。

宗教やそれに基づく死生観がメンタルヘルスの側面を持つことは既に Ellison や大宮司らによって報告されてきた<sup>3)4)9)10)15)31)</sup>。たとえば Ellison らは、宗教的死生観は現世で生じる様々な出来事を俯瞰的視座から解釈する認知的枠組みを提供し、個人

の健康や経済的困難などのストレスも取るに足りないものであるとする再解釈を与え、精神的安定と不安感の軽減をもたらすとしている<sup>3)</sup>。

さて、先述したように現代は承認不安の時代と呼ばれ、現代若年層は他者からの承認を求めて痛々しいほどの自己アピールを続けている。2017年度の流行語に「インスタ映え」がノミネートし華やかな画像で日常の光景を披歴し合う若者たちに注目が注がれた。SNSのプロフィール欄には、基本的な個人情報だけでなく、自分の性格、好きなブランド、お気に入りのアーティスト、応援しているスポーツチーム、口癖やマイブームに至るまで実に多種多様な情報が掲載され、SNS上は自己アピールをしあう場となっている。一方でSNS疲れ<sup>17)</sup>という現象が発生し、看過できないメンタルヘルスの問題が浮上している。頻繁にネット上のコミュニティに参加する若者たちは、自分のありのままの日常を開示するというよりも「他人にどうみられるか」を意識して不特定多数のコミュニティに参加している。また、そのようにして開示された情報の受信者は、これらの情報を自分自身の日常と比較することで自己を評価しがちである。「他人にどうみられるか」を意識しすぎたSNSへの投稿を揶揄した「キラキラツイート」や「マウンティング」といった言葉もある。自分の素敵な生活や価値の高さを誇示する行為を表している。彼らにとっての幸福とは、他者との比較や他者からの評価によって決定づけられているのである。近年社会学領域で問題視されている「ママ友カースト」や「スクールカースト」<sup>27)</sup>は、周囲と自分を比較することで「上」や「下」といった格差意識を持ち合うことから、深刻ないじめを発生させている。保護者間や同級生のコミュニティにおいて、他者との差異化はSNSを介することによって増強する傾向にある。コミュニティの外から俯瞰すれば些細なことであっても、現代人はその俯瞰的な視座を持たないために日々些末な差異に捉われているといえよう。

古来より、この俯瞰的視座を人々に与えてきたものの1つが宗教であった。西田は「人間が何処までも非宗教的に、人間的立場に徹すること、文化的方面に行くことは、世界が世界自身を否定す

ることであり、人間が人間自身を失うことである。(中略)人間が神を忘れた時、人間は何処までも個人的に、私欲的となる」<sup>34)</sup>と述べている。宗教性を失いつつある現代人は、個人を取り巻くあらゆる事象を他者との間で差異化し、その虚しい競争の中に自分が生きる意味を見出すしかない。現代若年層におけるコンサマトリー化<sup>11)16)36)</sup>、つまり即時充足的価値観の蔓延がまさにその徴証ではあるまいか。長期的なプロセスを必要とする目標を達成して得られる満足感よりも、手近で即物的な満足感を得ることが重視されているのである。そこで求められる幸福は日常生活の個々の欲求が満たされることであり、その各々が満たされているかの確認は往々にして他者との比較によって行われている。その比較の数だけ彼らは競争に明け暮れなければならない。しかしあらゆる競争の中で常に優位であり続けることは不可能である。当該研究結果が示したように無宗教の現代若年層は日常生活の様々な事柄によって幸福感が浮沈しやすく、簡単にON、OFFできる「幸福スイッチ」を抱えきれないほど持っていると言える。必然的に押せないスイッチは漠然とした不快感を生み出す原因となってしまう。あれもこれもといつの間にか増えていく「幸福スイッチ」は、実のところONできないスイッチ、すなわち「不幸スイッチ」と表裏一体であるといえよう。上述したように若年無宗教群には幸福／不幸スイッチが多い。近年若年層に増加する現代型うつ病<sup>14)25)32)43)</sup>も不幸スイッチの累積による漠然とした不快感や不全感と無関係とは言えないだろう。

さて、現代社会では年老いた親族は病院で亡くなることがほとんどであり、子どもや若者が死と対峙することは珍しくなってきた。生と死は連続しているにもかかわらず、現代人の意識の中ではどこか分断されているといえよう。伝統的な社会では宗教的文化や慣習が人々の生活に根付いており、宗教はその死生観を通じて人々に死を意識化させていた。すなわち、宗教は生の中にある人々と死を媒介する文化装置として機能してきたのである。しかし北平<sup>33)</sup>によると、現代では生きることの意義が取り分けて意識されるようになったことで、死の意義は相対的に小さくなり、さらには

死に否定的な意味を与え人生の終結と負の価値しか見出されなくなっている。個人主義化が進行する現代社会において、個としての自らの存在がいのちの連環の中に存在するという感覚が失われていくことは、個としての自身がいかなる存在であるかを幸福／不幸スイッチの ON・OFF の総和でしか確認できないことにつながる。木村<sup>18)</sup>は死を意識すること（メメント・モリ）を「自己自身の中に埋没し、安住している状態に衝撃を与えて、自己の存在を改めて確かめてみる」ことであると述べている。死を意識することは、世俗の些細な事象に埋没した生の意味付けを鮮明にし、個人の生活をより本来的なものへと立ち返らせることである。死生の意味づけを担ってきた宗教が希薄化し不幸スイッチの溢れる現代社会においては、既存宗教の根本的な再解釈や新たな代替システムが必要となるかもしれない。例えば子どもや若者たちが地域高齢者の生活や看取りにかかわる仕組みを設けるなど、死から生を捉えなおす機会を創成し社会の中に生と死の Diversity を促進していくことは、子どもや若者たち自身をエンパワメントすることにつながるだろう。又このような視点から若年層のメンタルヘルスを考え、死生にまつわる医療人類学的アプローチを精神科医療の中に組み入れていく可能性もあろう。

#### 〈参考文献〉

- 1) Argyle, M. (1987). *The Psychology of Happiness*. Routledge. (『幸福の心理学』, 石田梅男訳, 誠信書房, 1994)
- 2) アリストテレス, 『ニコマコス倫理学 (上)』高田三郎訳, 岩波書店, 1971.
- 3) Bradshaw, M., Ellison, C.G. (2010). "Financial Hardship and Psychological Distress", *Exploring the Buffering Effects of Religion*, 71, pp. 196–204.
- 4) 大宮司信 (1994) 「宗教と精神保健」『臨床精神医学』23(7), pp. 725–728.
- 5) 大宮司信 (1998) 「大学生と宗教」『精神科治療学』13(3), pp. 305–310.
- 6) 大宮司信 (2001) 「宗教と社会精神医学」『最新精神医学』6(4), pp. 377–381.
- 7) Diener, E. (1984). "Subjective well-being", *Psychological Bulletin*, 95, pp. 5452–575.
- 8) Diener, E., Diener, R.B. (2002). Will money increase subjective well-being? A literature review and guide to needed research, *Social Indicators Research*, 57, pp. 119–169.
- 9) Ellison, C.G., Gay, D. (1991). Region, Religious Commitment, and Life Satisfaction Among Black Americans, *Sociological Quarterly*, 31, pp. 123–147.
- 10) Ellison, C.G. (1991). Religious Involvement and Subjective Well-being, *Journal of Health and Social Behavior*, 32(80), pp. 80–99.
- 11) 古市憲寿 (2013) 「日本の「若者」はこれからも幸せか」『アステーション』79, pp. 88–102.
- 12) Gilbert, E., Saeki, M., Oishi, S., Maeno, T. (2014). Self-informant agreement for subjective well-being among Japanese. *Personality and Individual Differences*, 69, pp. 124–128.
- 13) Hommerich, C., 小林盾 (2014) 「生活に満足している人は幸福か— SSP-W2013-2nd 調査データの分析—」『成蹊大学文学部紀要』49, pp. 229–237.
- 14) 生田孝 (2014) 「臨床現場における「新型うつ病」について」『労働安全衛生研究』7(1), pp. 13–21.
- 15) 金見恵 (2004) 「日本人の宗教的態度とその精神的健康への影響—ISSP 調査の日米データの2次分析から—」『死生学研究』3(20), pp. 24–43.
- 16) 片桐新自 (2009) 『不安定社会の中の若者たち』世界思想社.
- 17) 香山リカ (2016) 「SNS 疲れ」『臨床精神医学』45(10), pp. 1237–1241.
- 18) 木村敏 (1973) 「メメント・モリ」『思想の科学』6(13), pp. 2–10.
- 19) 木村敏 (1987) 「宗教の隠蔽と開示」『現代思想』15(2), pp. 82–90.
- 20) 厚生労働省：平成30年度自殺対策白書 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/18/index.html>. (2018年12月19日閲覧)
- 21) 黒崎浩行, 渡辺光一, 弓山達也 (2011) 「日米の宗教概念の構造とその幸福度への効果—両国の共通性が示唆する普遍宗教性—」『宗教と社会』6(17), pp. 47–66.
- 22) 前野隆司, 佐伯政男, 大石繁宏, Minha L. (2013) 「人生満足度評定とアイテムオーダー効果の文化差」『行動経済学』6, pp. 85–87.
- 23) 前野隆司 (2017) 「ポジティブサイコロジーと日本人の幸せ」『千葉大学公共研究』13(1), pp. 78–85.
- 24) Maeno, T. (2017). Four Factors of Happiness as Design Parameters of a Product/Service, *Emotional Engineering*, 5, pp. 183–189.



- 25) 松浪克文, 上瀬大樹 (2006) 「現代型うつ病」『精神療法』32, pp. 308-317.
- 26) 南学 (2015) 「現代の若者の価値観と主観的幸福の検討」『三重大学教育学部研究紀要』66, pp. 171-178.
- 27) 森口朗 (2007) 『いじめの構造』新潮社.
- 28) Maslow, A.H. (1954). *Motivation and Personality*. Harper & Brothers Publishers, Inc. (『人間性の心理学』, 小口忠彦監訳, 産業能率短期大学出版部, 1971)
- 29) Maslow, A.H. (1968): *Toward a Psychology of Being*. Van Nostrand Reinhold Company Inc (『完全なる人間—魂のめざすもの』, 上田吉一訳, 誠信書房, 1998)
- 30) Maslow, A.H. (1998): *MASLOW ON MANAGEMENT*. John Wiley & Sons, Inc (『完全なる経営』, 金井壽宏監訳, 日本経済新聞社, 2001.)
- 31) 中村雅彦, 井上美穂 (2001) 「死生観が心理的幸福感に及ぼす影響」『愛媛大学教育学部紀要』47(2), pp. 59-99.
- 32) 中村敬 (2018) 「『現代的な抑うつ』は、どこから来て、どこに行くのか」『臨床精神病理』39, pp. 71-80.
- 33) 波平恵美子 (2013) 「文化人類学から見た生と死—現代人の死生観を再考する」細見博志編『死から生を考える—死生学入門・金沢大学講義集』北國新聞社, pp. 249-274.
- 34) 西田幾多郎 (1946) 『場所の論理と宗教的世界観』哲学論文集第七.
- 35) 岡部光明 (2015) 「何が人を幸せにするか? 経済的・社会的諸要因そして倫理の役割復活」『明治学院大学国際学研究』48, pp. 91-109.
- 36) Parsons, T. (1979). Religious and Economic Symbolism in the Western World, *Sociological Inquiry*, 49(1), pp. 1-48.
- 37) Roemer, M.K. (2010). Religion and Subjective Well-Being in Japan, *Review of Religious Research*, 51(4), pp. 411-427.
- 38) Sachs, J. D., Layard, R., Helliwell, J.F. (2018). *World Happiness Report 2018*, Working Papers id:12761, eSocialSciences.
- 39) 櫻井義秀 (2017) 「人は宗教で幸せになれるのか—ウェル・ビーイングと宗教の分析」『理論と方法』32(1), pp. 80-95.
- 40) Seligman, M.E.P. (2002): *Authentic Happiness*. ATRIA. (『世界でひとつだけの幸せ—ポジティブ心理学が教えてくれる満ち足りた人生』, 小林裕子訳, アスペクト, 2004)
- 41) 新宮秀夫 (1998) 『幸福ということ—エネルギー  
社会工学の視点から—』日本放送出版協会.
- 42) Strack, F., Argyle, M., Schwarz, N. (1991): *International Series in Experimental Social Psychology 21*, Pergamon Press.
- 43) 樽味伸, 神庭重信 (2005) 「うつ病の社会文化的試論—特に「ディスチミア親和型うつ病」について—」『日本社会精神医学学会』13, pp. 129-136.
- 44) 寺崎正治, 網島啓司, 西村智代 (1999) 「主観的幸福感の構造」『川崎医療福祉学会誌』9(1), pp. 43-48.
- 45) The Gallup Organization. [http://news.gallup.com/topic/category\\_wellbeing.aspx](http://news.gallup.com/topic/category_wellbeing.aspx) (2018年12月19日閲覧)
- 46) 統計数理研究所: 日本人の国民性調査. [https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3\\_1/3\\_1\\_20132.htm](https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_20132.htm) (2018年12月19日閲覧)
- 47) 筒井義郎, 大竹文雄, 池田新介 (2009) 「なぜあなたは不幸なのか」『大阪大学経済学』58(4), pp.20-57.
- 48) United Nations Statistics Division: National Accounts Main Aggregates Database. worldhospital2. <https://unstats.un.org/unsd/snaama/Introduction.asp> (2018年12月19日閲覧)
- 49) 山口和孝 (1998) 「戦後の宗教と教育をめぐる争点と課題」『教育学研究』65(4), pp. 32-41.
- 50) 山竹伸二 (2011): 『「認められたい」の正体—承認不安の時代』講談社.

## **Religion and Subjective Well-being** **— Oblivion of Death and Modern Japanese Society —**

KIMURA Yuri  
HAMASAKI Yukiko

〈Abstract〉

Numerous statistical studies have been conducted on subjective well-being, and, in recent years, studies showing that religions contribute to subjective well-being have drawn much attention. More than 70% of contemporary Japanese being reported as non-religious, what kind of factors are contributing to the “happiness” of the Japanese? In order to answer this question, we conducted a questionnaire survey on subjective well-being among youth, and carried out statistical data analysis. The results show that subjective well-being fluctuate easily for non-religious individuals because of many factors affecting them. Furthermore, satisfaction of esteem needs (Maslow’s hierarchy of needs) strongly contributes to happiness in non-religious groups. Based on these results, we consider the problem of mental health in modern young generation, from a psychopathological point of view.

Key words : Religion, subjective well-being, modern young generation, Maslow, unhappiness-switch